

# 仲井間千代さん

1927(昭和2)年5月1日生

民間人

パラオ高等女学校(1期生)

パラオ



私の住んでいた所は歌にも歌われていた南の島、楽園といわれたパラオ島でした。平和で美しい海や、ヤシの木の實がなりさがる豊かな島でした。が、「大東亜戦争」が始まって以来、戦争の足音が身にせまるのを感じました。当時女学生で勉学に夢中でしたが、日ごとに戦争が近づき、私たちは学問よりも、奉仕作業をさせられました。防空壕掘り、さびた弾みがき、野戦病院の看護婦さんのお手伝い等々、国のためにつくしたい心で青春の心は燃えていました。軍国少女でした。

ある晴れた朝、急に爆音がしたと思ったら、米国の爆撃機B29の来襲でコロールの町が一瞬にして焼け野原となりました。その時防空壕に逃げて私たち一家は無事、その日の夜、助かった近所のおばさん子供たちで、着の身着のまま持てるだけの食品をかかえて小舟にのせられ、海の対岸を目標に皆で助け合いながら避難しました。

アイミリーキと云う所で避難生活が始まり、それからが大変でした。食べものもなくなり、生きるために食べものを探し歩いて山や海と、子供をもつ母親は大変でした。夫や若い男性は現地召集で軍隊に行ってしまったのです。残された女、子供だけで生きていくのは大変でした。民間人は栄養失調で子供と共に寝ていて死んでいきました。でも誰も助けてあげられませんでした。自分も何もできないのです。

私たち女学生は野戦病院に集まる指示があり、私はガスパンと云う所に行き、級友と共にジャングルの森の病院で看護婦として兵隊さんの看病に当りました。内科三病棟でした。毎日、兵舎の生活、まるで原始人のようなジャングルの森での暮らしは、娘の私たちに強い心を与えました。病院の看護も、死人のかたづけも、後かたづけも泣かずにやれました。日本の勝利を信じていたのです。「海行かば水づくかばね、山行かば草むすかばね、大君の辺にこそ死なぬ、かえり見はせじ」この歌を心の中で唱えながら毎日毎日生きました。終戦70年と長いようですが私にはついこの前の出来事みたいに心の中に残っています。

70年前に戦争時でも昭和20年3月20日の院内で卒業証書を教頭先生から手渡されたことが夢のような気持ちです。あれから70年、今報道やニュースやテレビの番組で戦争のことを知りびっくりしたり心をいためています。私よりもたくさんの方がご苦労なされたと聞いています。戦争で世界中の人たちがなくなったのです。戦争なんてどうしてするのでしょうか。地球上の人間は皆兄弟と同じと思います。戦争がこの世からなくなりますよう祈っています。

(2016年9月4日 あの戦場体験を語り継ぐ集いより)